

令和元年度 あまっ子ステップ・アップ調査の結果について

1 調査目的

学校は、児童生徒の学力と学習状況を把握することで、一人一人に応じた指導の充実や学習状況の改善を図る。また、教育委員会は、教育施策の成果と課題について検証し、その改善を図ることで、教育活動に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査内容ごとの人数（人）

学年	学力調査					生活実態調査
	国語	算数・数学	英語	社会	理科	
小学1年生	3,314	3,312	/	/	/	3,318
小学2年生	3,369	3,375				3,385
小学3年生	3,361	3,363				3,377
小学4年生	3,322	3,324				3,351
小学5年生	3,481	3,483				3,499
小学6年生	3,480	3,485				3,499
中学1年生	2,931	2,930	2,935	2,934	2,933	2,948
中学2年生	2,859	2,859	2,858	2,862	2,859	2,861

3 実施日

小学校…令和元年12月10日（水） / 中学校…令和2年1月10日（金）

4 学力調査の概況

学習指導要領に示されている目標や内容に照らしたテスト形式の全国共通の問題で、基礎的・基本的な内容（約70%）、発展的な内容（約30%）の定着度を調査した。

【表の見方】

学力層別人数割合・・・全国の総受検者（人数非公表）を得点順に25%ずつA～D層に分け、本市において、どの層にどれだけの人数がいるかを表した割合（%）

達成率・・・・・・・・・・「目標値」を上回った児童生徒の人数割合（%）

目標値・・・・・・・・・・各教科において「おおむね満足」といえる正答率（%）。その水準まで定着できていれば、次の学習内容に進むことができる目安として、設定されている。

(1) 小学校

表1 小学校における達成率と学力層別人数割合

		達成率 (%)	学力層別人数割合 (%)				
			A層	B層	C層	D層	
一年	国語	74.4 (-)	19.8 (-)	23.9 (-)	26.0 (-)	30.3 (-)	R1 H30
	算数	63.4 (-)	16.0 (-)	20.5 (-)	27.7 (-)	35.7 (-)	
二年	国語	80.9 (+10.6)	27.1 (+7.2)	21.6 (-0.9)	25.9 (-0.9)	25.3 (-5.5)	R1 H30
	算数	71.4 (+13.8)	24.6 (+5.9)	23.8 (+8.1)	24.2 (-3.6)	27.4 (-10.3)	
三年	国語	66.9 (-0.7)	20.9 (+2.4)	24.4 (+2.1)	25.9 (-1.0)	28.8 (-3.4)	R1 H30
	算数	64.0 (-0.8)	22.6 (+5.5)	26.0 (+3.7)	27.5 (-0.3)	23.9 (-8.9)	
四年	国語	68.5 (+9.7)	21.7 (+2.2)	23.3 (+0.4)	25.4 (-2.9)	29.6 (+0.2)	R1 H30
	算数	64.2 (+3.9)	22.7 (+1.4)	22.6 (-1.0)	27.8 (+1.8)	26.9 (-2.2)	
五年	国語	61.7 (+14.8)	19.9 (+3.1)	22.4 (+2.6)	27.2 (-1.5)	30.4 (-4.3)	R1 H30
	算数	59.5 (+13.7)	22.1 (+4.9)	24.3 (+1.6)	24.9 (-3.6)	28.7 (-2.9)	
六年	国語	63.4 (+14.7)	23.2 (+3.5)	22.5 (-0.6)	26.5 (-0.6)	27.8 (-2.2)	R1 H30
	算数	69.9 (+16.0)	26.4 (+4.2)	24.3 (+2.2)	24.0 (-2.3)	25.3 (-4.0)	

※カッコ内の数値は同一母集団（例：今年度の小4と昨年度の小3）における昨年度との差を示す。

(2) 中学校

表2 中学校における達成率と学力層別人数割合

		達成率 (%)	学力層別人数割合 (%)				
			A層	B層	C層	D層	
一年	国語	59.9 (+0.5)	22.6 (-0.6)	24.9 (+1.7)	25.7 (+0.5)	26.8 (-1.6)	R1 H30
	数学	66.6 (+12.8)	26.7 (+5.1)	25.1 (+4.1)	24.6 (-0.3)	23.5 (-9.1)	
	英語	54.7 (-)	26.2 (-)	24.7 (-)	23.5 (-)	25.6 (-)	
	社会	49.5 (-)	22.8 (-)	23.9 (-)	25.2 (-)	28.1 (-)	
	理科	54.3 (-)	22.5 (-)	22.4 (-)	23.7 (-)	31.3 (-)	
二年	国語	66.5 (+12.3)	20.6 (-3.6)	24.1 (+0.9)	26.8 (+1.0)	28.5 (+1.6)	R1 H30
	数学	58.7 (-8.4)	25.3 (-1.7)	25.1 (+2.1)	24.4 (-0.4)	25.2 (+0.1)	
	英語	59.1 (+4.4)	23.4 (-2.0)	26.6 (+3.8)	24.7 (+1.5)	25.3 (-3.3)	
	社会	58.2 (-5.6)	19.1 (-5.6)	20.9 (-3.7)	26.5 (+2.2)	33.5 (+7.1)	
	理科	52.3 (-8.7)	21.2 (-3.0)	22.6 (-1.8)	24.9 (+1.1)	31.2 (+3.6)	

※カッコ内の数値は同一母集団（例：今年度の中1と昨年度の小6）における昨年度との差を示す。

【まとめ】

学力調査では、同一母集団における達成率の推移を見ると、小2から中2まで、多くの教科が向上する結果が見られた。同一母集団における学力層別人数割合の推移を見ると、小学校では、多くの学年でC層とD層の人数割合が減少している。中学校では、中1理科および中2理科・社会ではD層が30%以上という結果が見られた。

5 生活実態調査の概況

アンケート形式（主に4択）で、「①学びの基礎力、②社会的実践力、③学級力、④家庭学習力」の4つのカテゴリーに基づく質問項目について調査した。

表3 令和元年度 生活実態調査におけるカテゴリー別 平均スコア

	小学校					
	1年	2年	3年	4年	5年	6年
①学びの基礎力	78.8 (-)	78.6 (-1.1)	70.5 (-7.1)	65.8 (-4.3)	63.2 (+0.1)	63.4 (+1.0)
②社会的実践力	86.1 (-)	88.1 (+0.8)	70.3 (-16.3)	65.4 (-3.5)	62.0 (-0.2)	62.6 (+1.7)
③学級力	83.8 (-)	80.8 (-4.8)	76.1 (-3.5)	69.4 (-6.4)	65.3 (-1.9)	62.2 (-0.2)
④家庭学習力	87.8 (-)	91.8 (+3.7)	76.7 (+0.6)	71.4 (-4.7)	67.4 (-1.1)	64.7 (-1.5)

	中学校	
	1年	2年
①学びの基礎力	59.3 (-3.8)	57.2 (-1.1)
②社会的実践力	56.5 (-5.9)	55.5 (+0.7)
③学級力	57.4 (-6.7)	56.4 (+1.7)
④家庭学習力	59.7 (-5.5)	53.9 (-4.1)

※カッコ内の数値は同一母集団（例：今年度の中1と昨年度の小6）における昨年度との差を示す。

【表の見方】

平均スコア・・・各質問の回答を「とても：3、まあ：2、あまり：1、まったく：0」で数値化し、カテゴリー別に0～100の間になるように数値化した値。スコアが大きいほど、肯定的な回答が多かったことを表している。

表3における各カテゴリーで昨年度からの推移に顕著な差が見られた学年の質問項目を抜粋した。

表4 カテゴリー別 質問項目例と肯定群回答割合

学年	質問項目	肯定群回答割合 (%)
①学びの基礎力（豊かな基礎体験、学びに向かう力、自ら学ぶ力 など）		
小3	わからないことはそのままにせず、わかるまで努力している。	67.4 (-11.8)
	新しく習ったことは、何度もくり返して練習している。	56.7 (-11.7)
小6	パソコンやインターネットを使う。	76.5 (+12.5)
	かん違いや思いこみがないか、しっかり見直しをしている。	69.2 (+8.5)
②社会的実践力（問題解決力、自己成長力、豊かな心 など）		
中1	調べてわかったことをもとに、考えをまとめることができる。	48.7 (-14.3)
	調べたことを、パソコンを使ってまとめたり、発表したりすることができる。	32.2 (-13.2)
小6	調べたことを、パソコンを使ってまとめたり、発表したりすることができる。	48.2 (+6.7)
	テレビのニュースや新聞などで、最近の社会のできごとをよく知っている。	71.3 (+5.8)
③学級力（対話力、支え合う力、規律力 など）		
小4	友だちのよいところやがんばりを認めて伝え合っている学級です。	77.8 (-5.0)
	友だちの間に上下関係がなく、誰とでも平等に接している学級です。	81.3 (-4.1)
中1	友だちの話を賛成・反対・つけたしと、つなげるように発言している学級です。	50.6 (-26.4)
	小さなけんかや、トラブルは、話し合いで解決できる学級です。	56.8 (-14.7)
中2	自分たちの学習や生活をよくするための話し合いや活動をしている学級です。	55.9 (-14.5)
	小さなけんかや、トラブルは、話し合いで解決できる学級です。	60.5 (+10.7)
中2	友だちの間に上下関係がなく、誰とでも平等に接している学級です。	72.6 (+8.7)
	友だちのよいところやがんばりを認めて伝え合っている学級です。	71.1 (+8.6)
④家庭学習力（家庭学習の環境や習慣について）		
中1	授業で習ったことは、その日のうちに復習している。	22.6 (-9.9)
	テレビやラジオをつけずに集中して学習している。	48.6 (-7.7)
	学校の先生が出した宿題をきちんとやりとげている。	80.3 (-6.5)
小2	家で学習していて、わからないときは教えてくれる人がいる。	90.4 (+6.6)

※カッコ内の数値は同一母集団（例：今年度の中1と昨年度の小6）における昨年度との差を示す。

【まとめ】

生活実態調査では、同一母集団における平均スコアの推移を見ると（表3）、学年が上がるにつれて肯定的な回答割合が減少する結果となった。ただ、これは全国的な傾向であり、今年度の総受検者と比較すると、本市の回答は、全カテゴリーにおいて、昨年度よりも向上している傾向が見られる。

6 分析・考察

学力調査と生活実態調査の結果から、特徴的な傾向は以下の通りである。

- (1) **【D層の割合】** 小学校におけるD層の割合が昨年度に比べ減少している。特に小2算数ではC層・D層の割合が減り、A層・B層の割合は増えている。中学校の数学・英語の学力層別人数割合が、ほぼ全国と同等となっている。一方、中2理科・社会では、D層の割合が増加している。

《「4 学力調査の概況」参照》

小学校では、昨年度から学力向上の取組として、全ての小学校での「帯学習」や「放課後学習」の中でドリル学習を反復したことが基礎的な学力の定着につながり、D層の減少に影響していると考えられる。「帯学習」や「放課後学習」に関しては、内容や取組方法は、学校によって差異がある。今後は、D層の割合が減少した学校や、達成率が増加した学校の効果的な取組を市内へ普及する働きかけが必要である。

中学校では、教科によって差がみられた。数学・英語の学力層別人数割合を見ると、各層ともおおむね25%となっており、相対的にみて全国との差がほとんどない。しかし、社会・理科に関してはD層の割合が多い。今後は、「主体的・対話的で深い学びの」実施にむけた授業改善を進めるために、授業改善・学力保証推進チームの学校訪問や、市内の教科研究会と連携したりすることが必要である。

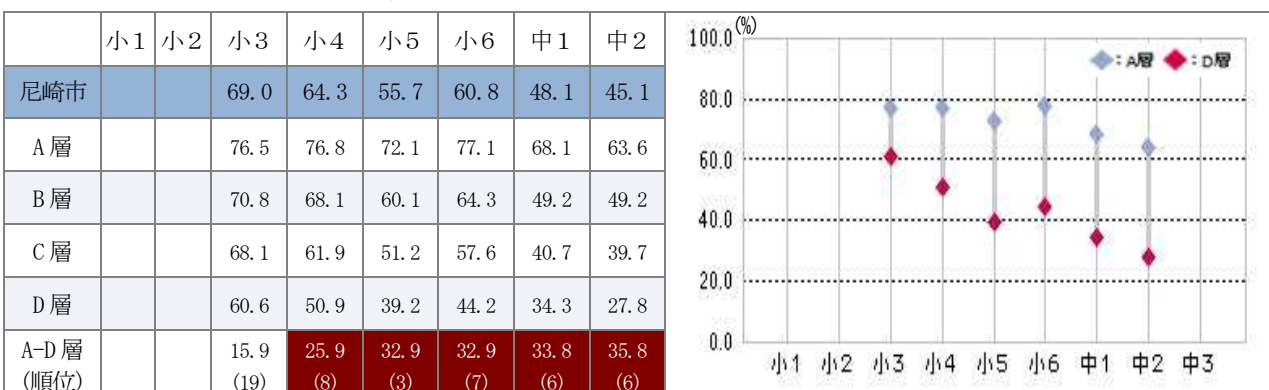
- (2) **【自己を振り返る学習スキルの育成】**「調べてわかったことをもとに、考えをまとめることができる」「授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている」など、自分が習ったことを個別の知識として習得するのではなく、それらの知識を自分で整理したり、「なぜそうなるのか」というような理由を考えたりすることは大切であり、高学年になるほど学力に正の影響を与える傾向がある。

《表5-①②参照》

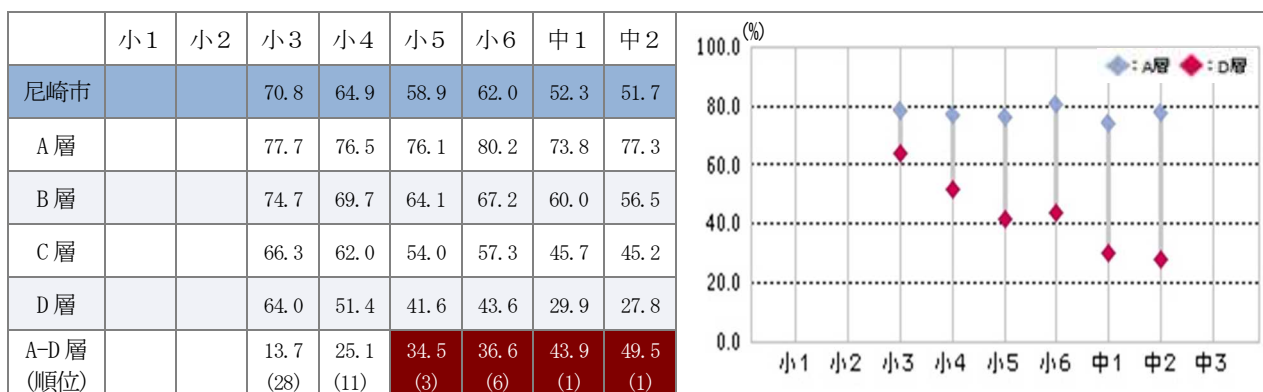
【表5】 学力調査（4層）と生活実態調査のクロス分析

※下表の数値は、本市において、学力層（A～D層）ごとに、各質問に対し肯定的に回答した割合（%）を示しています。
 ※「A-D層」の数値は、A層からD層の割合を引いた値です。順位は、学年A-D層の差の大きい順を示しており、全ての質問中で、10位以内のものに濃い色の網掛けをしています。

- ① 調べてわかったことをもとに、考えをまとめることができる。



② 授業で習ったことはそのまま覚えるのではなく、その理由や考え方も一緒に理解しようとしている。



授業では、教員が知識を伝達するだけの指導でなく、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めていく必要がある。また、その中で新しい学習指導要領が求める思考力・判断力・表現力や学びに向かう力等を育成していく必要がある。

(3) 【学力調査と意識調査の変化】

小学校41校の中から、平成30年度と令和元年度の学力調査の結果を比較したとき、D層の割合が多くなる学校で改善が見られたが、その中で特に、D層の割合が25%前後まで改善された学校が6校見られた。そこで、これら6校と尼崎市全体の意識調査の経年変化を比較した。低・中学年では、授業改善に関する項目で、高学年では、社会的実践力に関する項目で特に顕著な変化がみられた。

《表6参照》

表6 (同一母集団) 意識調査における肯定群回答割合の経年変化

質問項目	経年学年	6校平均	市内平均
国語の授業で、物語を作ったことがある。	小2→小3	+ 18.6	- 9.3
	小3→小4	+ 0.2	- 8.0
数学(算数)の授業で、グループで話し合いや教え合いをしている。	小2→小3	+ 2.9	- 4.1
	小3→小4	+ 2.9	- 8.2
いつも新しいアイデアを考えたり、工夫したりしている。	小4→小5	+ 5.2	- 1.6
	小5→小6	+ 8.3	+ 0.3
わからないことはそのままにせず、わかるまで努力している。	小4→小5	+ 6.0	- 2.1
	小5→小6	+ 6.8	- 0.5

今後、学校は、D層の割合を減らすために、基礎的なドリルを繰り返し行うとともに、小学校の低・中学年の時から授業に様々な工夫を凝らし、児童生徒が主体的に学ぶための素地を指導することが必要である。また、学年が上がることに伴い、学びの基礎以外に非認知能力でもある「社会的実践力」や「やりぬく力」の育成や指導を一層伸ばさせる必要がある。さらに、一人ひとりの応じたきめ細かな指導に生かしていく。

(4) 【学年間のばらつき】 学年間のばらつきが改善されている小学校があることを確認できる。

《表7-1, 表7-2参照》

平成30年度と令和元年度で小学校における学年間のばらつきを見ると、ばらつきが改善された学校が数校ある。これらの学校では、「〇〇プラン」の様な、児童が自ら計画的に学習を進めることができるような取組を進めており、学力の低い児童に対しても効果的な取組となっている。

表7-1 平成30年度 小学校における学年間のばらつき（概要）

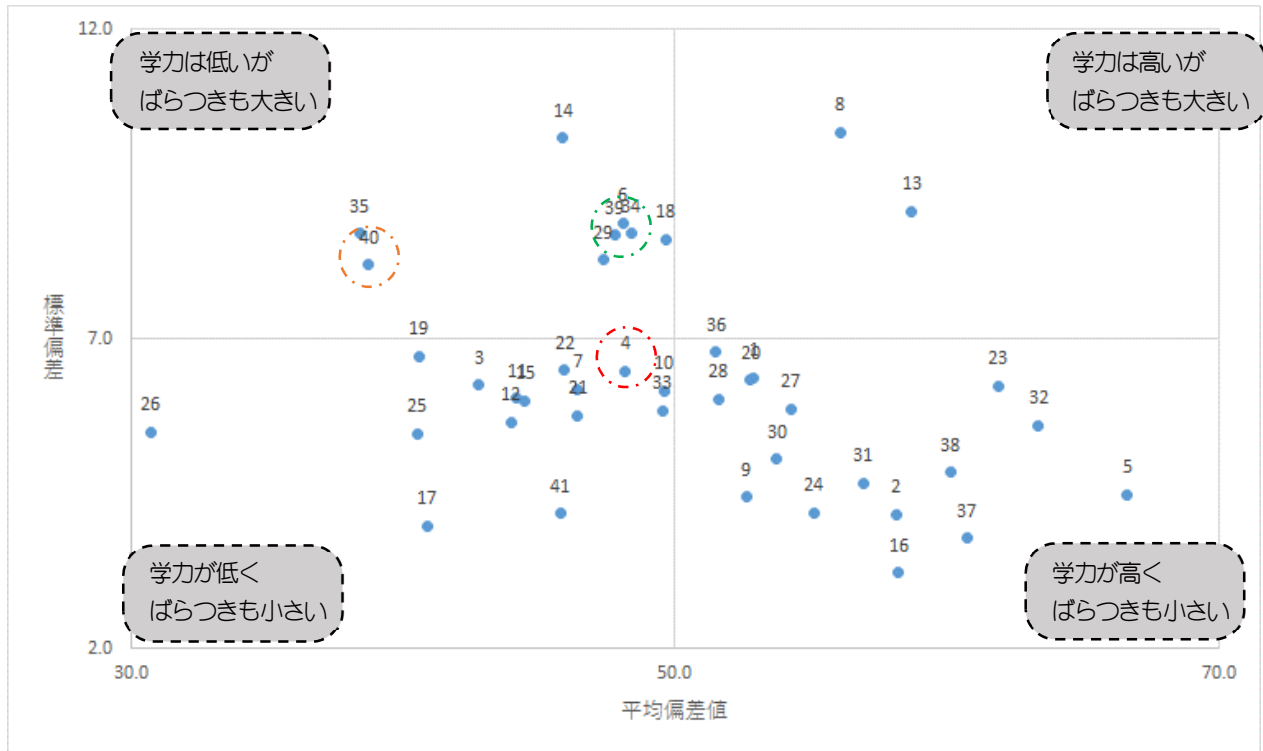
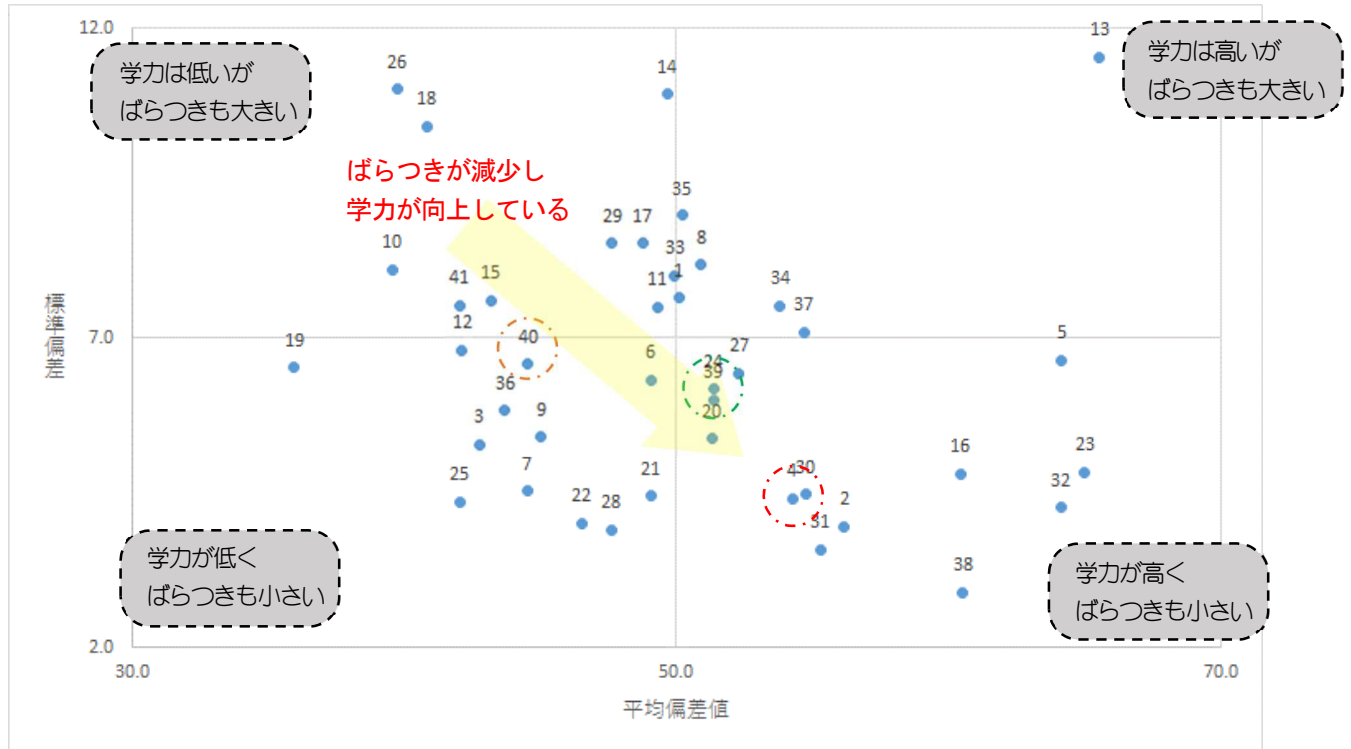


表7-2 令和元年度 小学校における学年間のばらつき（概要）



【まとめ】

教育委員会は、効果をあげた学校の取組や各校での具体的実践などを、全ての小中学校から選任された教員で構成する研究部会において報告し、共有することで各校に還元していく。また、今年度は2年間という短期的な視点での比較となったが、今後は長期的な視点で比較が可能になっていくため、複数年で学力層割合が改善された学校や、意識調査で優れた特徴が見られる学校などの分析を行っていく。さらに、引き続き「基礎学力の保証」と「授業改善」に取り組むとともに、「中学校版学力向上の手引き」の作成を進めていく。